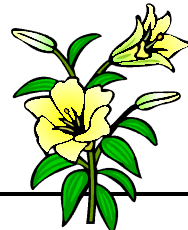




ちくさ咲く

みち



あたりまえの日常を、あたりまえに送れること のかけがえのなさ

校長 花生 典幸



よいお天気の中、令和5年度の「運動会」が5月13日（土）に実施されました。当日は、朝早くからたくさんの保護者のみなさま、ご来賓の方々に足を運んでいただき、がんばっている子どもたちに温かい励ましの声援を送っていただきました。ありがとうございました。あらためて感謝申し上げます。

そして、6年生は、運動会でつけた自信を携えて、5月24日（水）から26日（金）まで、二泊三日の北海道への「修学旅行」に出かけてまいりました。子どもたちにとっては、親元を離れて友だちと一緒に過ごす一大イベントです。小学校生活において最高の思い出づくりの場でもあります。北海道のよさをたっぷり味わい、たくさんの楽しい充実した思い出をつくってまいりました。

さて、学校はだんだん以前のような日常を取り戻しつつあります。

ずっと着けてきたマスクがはずれ、これまで自粛していた音楽集会も再開しました。

子どもたちと先生方のように見ながら、**あたりまえの日常を、あたりまえに送れること**のかけがえのなさに、あらためて気づかされたような思いがしています。

その学校のあたりまえの風景の一つに、**「遊び」**があります。

本校の子どもたちは、中休みの15分間と昼休みの20分間（水曜日だけはロングの40分間！）をいつも待ちわび、天気のよい日には、どの学年の子も目をキラキラさせて校庭にとび出していき、鬼ごっこやドッチボールに汗を流しています。

その姿を眺めながら、「遊びの大切さ」を述べた、印象深い文章のことを思い出しました。少し引用してみます。



—— 自分がやりたいことをやる「遊び」には、とても大きな意義があるとわたしは考えています。やりたいと思うことがあれば、そのためにいろいろなことを考えて達成しようとしめます。それは問題解決能力です。与えられたことだけをやるばかりの体験では、この力は身につけません。なぜならすべて大人の予定調和の中だけだからです。そうすると、大人の望む行動や答えを求める生き方になってしまいます。それとは反対に、その子のもっている力を引き出すことが大切なのです。そして、その最初のスイッチは、子ども本人が自分の中で見つけてONにしてほしいのです。

やりたいことを禁止されてばかりいると、抑制された状態が続き、無意識のうちにストレスが溜まります。ある程度の大人であれば、そのストレスを見つけて対応できますが、子どもの場合は、それに気づくこともできずに溜まっています。その結果が、「キレル」とか、「無気力」の元になります。だから、「遊び」は、子どもにとって、とても重要なのです。

金井 聡 氏（学び方を学ぶプロジェクト・自然学校代表）

毎日の鬼ごっこは、子どもたちを、学年の枠を越えて結びつけています。追いかけて、追いかける中で、暗黙のうちに配慮や思いやりが生まれ、温かい自然発生的な交流があちこちにつくられていきます。遊びのかけがえのなさ（意義・価値）についても、強く実感させられた5月でした。